

コラージュ表現による感情体験に関する一考察

木下由美子*・伊藤義美**

A Study of Self-feelings Expressed through the Collage Technique

Yumiko KINOSHITA* and Yoshimi ITO**

Abstract

Collage technique has been frequently used in various areas of clinical psychotherapy in recent years. In this paper it was investigated what self-feelings were experienced through the works of collage.

People can feel nice or not nice for the works of collage. When people can not feel nice, they may experience anxiety to confront and cope with their self-feelings in the process of making the collage.

Subjects were 194 students and made the works of collage. STAI (State Trait Anxiety Inventory) with 20 items was put into practice as pre-test and post-test before and after making the work of collage. The images of collage work were measured by the Semantic Differential questionnaire of 23 bipolar adjective rating scales.

Anxiety-decrease group (122 subjects) and High anxiety-decrease group (48 subjects) had positive images of their collage works. They could feel nice because of having experienced therapeutic factors like catharsis and self expression in the process of making collage works. Anxiety-increase group (62 subjects) and High anxiety-increase group (48 subjects) had negative images about their collage works. They did not feel good because they could not successfully integrate their feeling experiences of making collage works into their mental processes.

* 名古屋大学大学院人間情報学研究科 (博士課程後期課程)

Graduate School of Human Informatics, Nagoya University (Doctoral Course)

** 名古屋大学情報文化学部 School of Informatics and Sciences, Nagoya University

Key words : コラージュ技法 (Collage technique), 感情体験 (feeling experience), 状態不安 (state anxiety), SD法 (Semantic Differential method), イメージ評価 (image estimation)

I はじめに

コラージュ (collage) とは, もともとは “coller” というフランス語に由来する言葉で「のりで貼る」という意味がある。写真や絵や文字などを新聞, 雑誌などから切り抜き, これを画用紙などに貼って一つの作品にするもので, 20世紀初頭に生まれた美術の表現である。

美術史におけるコラージュが心理臨床場面に影響を与えるようになるには, 半世紀ほどの時間が必要であった。美術分野に発したコラージュが臨床場面に登場するきっかけは, 現在のところあまりはっきりしていないようである。森谷 (1993) がまとめているところによると, コラージュ技法をテーマにした一番早期のものは, 1972年のバック (Bauck, R. E) とプロヴァンチャー (Provancher, M. A) による「評価技法としてのマガジンプクチャー・コラージュ」が『アメリカ作業療法誌』に掲載されているのが最初であるという。彼らは「精神分析の枠組みから, 患者の人格の力動的構造に作用している症状を評価する」ために1968年2月から精神病院の新入院患者約500例に対して, 作業療法プログラムの一つとしてコラージュを実施してきた。その結果, 躁病やひどい行動化を引き起こす患者は, しばしば5~10枚の切り絵を使い, 一方うつ病や分裂病患者はたった一枚の絵しか使わないことが判明した。そしてこの絵の内容は, しばしば無意識的葛藤を暴露するもので, 評価技法として有効であることを指摘している。こうしてコラージュ技法の臨床場面への応用は, アメリカのデトロイトの作業療法士を中心に始まり, 後にアートセラピストたちにも展開していった。

日本においては1976年に山中 (1986) が, クライエントの自発的なコラージュ作品が治療場面に出現したケースを「写真映像をメッセージとした思春期心身症の精神療法過程」としてまとめている。以降, 1987年に杉浦京子, 森谷寛之らが始めたコラージュ療法は, 学会やセミナーなどをきっかけにその実践家や研究者が急速に増えてきた。児童相談所, 教育相談室, 精神科, 神経科, 心療内科, 小児科などに普及している。また, 1989年に杉浦, 森谷らがコラージュを臨床場面へ導入した効果について発表したことを契機に, コラージュ療法は心理療法の一つとして位置づけられるようになった。杉浦 (1994) は「コラージュ療法の位置づけとして, 絵画療法と箱庭療法の間当たる位置を考えている。絵の苦手な人や箱庭に抵抗がある人にも身近にある材料ででき, 方法も簡単であるなどで受け入れられやすい」としており, その取っつきやすさにより, 「急性期の精神病状態を除外すれば, 病態水準や年齢を問わない幅の広い適応が可能である」(入江, 1993) とされている。

II 問題と目的

私たちが日常の中で言葉や芸術あるいは身体などの表現をするとき、「すっきり」してカタルシスを得られる場合と、「言い過ぎた」「どうしてここまで表現してしまったのだろう」などと少し後悔してしまう場合がある。筆者自身も何かを表現する場合に、表現したいとき、表現したくないとき、または表現して良かったとき、表現して後悔するときに、自分の性格傾向のみならず、その日の気分や体調によって様々あるように感じている。そのように私たちは恐らく「表現すること」を大げさに出したり、小出しにしたり、または出さなかったりといったことを自らコントロールして生活している。特に前言語的な日常の心理的活動表現の場合、イメージの世界にも入っていくこととなるが、そういった言葉になりにくい表現のなかで、言葉の表現よりも多少曖昧になりやすい「感じ」や「気分」というものは一体どういものであるのだろうか。そういった表現方法の一つであるコラージュという課題を経験するとき、体験者はその時の気分によって自らの感情をどのように体験し、作品に表現していくのであろうか。

杉浦（1994）はコラージュの「治療的要因」に①心理的退行②自己表出（気持ちの解放）③内面の意識化④自己表現と美意識の満足の4点をあげており、「自分の内面にあるものを表現できた喜びや、バランスのとれた作品ができたときの喜びは、自己表現と美意識の満足感である」としている。しかしながら、コラージュ活動や作品が不満足で終わった場合、「材料の選択の問題と、制作態度の違いがあると考えられる」としているが、果たしてそれだけであらうか。つまり、コラージュのような非言語的表現を作品として制作した場合、意識的あるいは無意識的に表現したいことが「ピッタリ」きて快やカタルシスや安定感が得られる場合と、「何か違う」感じがして不快になる両者の場合がある。そこでコラージュ制作後に「不快」が生じた場合、筆者はそこに作品そのものや、作品を作る過程とその感情に関わっていくことの「不安」があるのではないかと考える。

ロロ・メイ（1953）は、不安を「自己の存在、ないし人間が自己と同一視するところの何らかの価値が危険にさらされたときに生ずるところの、人間にとって根本的な反応様式である」としている。つまり「不快」とは作品と向き合ったときに、その中に表れた自己の価値が危険にさらされる場合があらうし、逆に「ピッタリ」した場合には作品の中に自己の価値を肯定的に見いだしている、ということになるだろう。

また水島（1991）は、「人は何らかの内的イメージをもち、それにピッタリするように作品を外在化する。ここではまず、自分のイメージにピッタリ合うように作品を修正していく過程が重要になる」としており、コラージュ作業の上での選ぶ、切る、構成する、貼るという体験は、内的イメージを外在化させたり、さらに修正していくというコラージュ過程それ自身に治療的意味があるのである（中井、1993）。

そういったコラージュ制作後に「快(ピッタリ, つまり安心)」,あるいは「不快(ピッタリしない, つまり不安)」になった場合の作品についてのイメージや感情はどのように異なるのであろうか。そこで本研究ではSTAI(state-trait anxiety inventory)を用い, まずコラージュ制作の前と後で, 被験者のその時の状態不安がどのように変化しているかを調査し不安低減群と不安増大群に分ける。併せて, 作品の印象を数量的にとらえるためのSD法尺度により, 不安低減群と不安増大群の間でどのような相違があるかについて研究することを目的とする。従来の研究ではコラージュ療法の臨床場面での事例研究,あるいは形式分析や表現特徴などの基礎的研究が主であった。そこで本研究ではコラージュを表現することによってその体験の「全体的な感じ」がどのようなものであるのかを解明することにする。

III 方 法

1. 調査対象について

調査対象は, 愛知県内のA大学の学生, およびB短大の学生, 男性39名, 女性193名の計232名である。有効回答数は, 194名であった。

2. 手続き

質問紙調査による「STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版(大学生用)」の状態不安(A-State)尺度「STAI FORM X-1」の20項目(例えば「1. 平静である」「3. 固くなっている」など)を用い, まずコラージュ制作(マガジン・ビクチャー法, コラージュ・ボックス法を導入した。筆者に余裕のあるときにはできるだけ相互法で行った)の前と後で, 被験者のその時の不安状態がどのように変化しているかを調査し, 併せて箱庭作品について岡田(1984)が用いたものに3項目を追加したSD法尺度(7段階評定)の質問紙に答えてもらった。使用した各対形容詞尺度は次の通りである。

1. まとまった—雑然とした, 2. 固い—柔らかい, 3. 貧弱な—豊かな, 4. 女性的—男性的, 5. 深い—浅い, 6. こせこせした—のびのびとした, 7. 動的—静的, 8. 未熟な—成熟した, 9. 開放的—閉鎖的, 10. 小さい—大きい, 11. 安定した—不安定な, 12. 暗い—明るい, 13. 弱い—強い, 14. 充実した—空虚な, 15. 不調和な—調和した, 16. 積極的—消極的, 17. アブノーマルな—ノーマルな, 18. にぎやかな—さびしい, 19. 緊張した—くつろいだ, 20. 愉快な—不愉快な。また追加した形容詞対は, 次の3項目である。
21. 満足した—不満足な, 22. ぴったりした—ぴったりしない, 23. 快な—不快な。

3. 分析方法

整理方法として, 「自己評定質問紙①(コラージュ前 STAI)」および「自己評定質問紙②(コラージュ後 STAI)」を数値化し, 「自己評定質問紙①—自己評定質問紙②」の得点が正值の場合

合を不安低減群とし、「自己評定質問紙①—自己評定質問紙②」の得点が負値の場合を不安増大群とした。

有効回答数 194 名のうち、不安低減群全体は 122 名 (62.8%)、不安増大群全体 62 名 (32.0%) であった。また、不安低減群の上位 25% の 48 名を不安低減高群とし、不安増大群の上位 25% の 48 名を不安増大高群とした。コラージュ作品をつくる前後で 10 名 (5.2%) には変化が見られなかった。

次に、1. SD 法尺度の評定点から因子分析によって因子を抽出した。また不安低減群と不安増大群及び不安低減高群と不安増大高群の得点を t 検定により比較した。

2. SD 法尺度による、不安低減群と不安増大群及び不安低減高群と不安増大高群のコラージュ作品に対するイメージの出現率を検討した。

IV 結 果

1. SD 法尺度の因子の抽出・命名

SD 法尺度の評定点について因子分析を行った結果、対形容詞に 3 因子が抽出された。バリマックス法による、回転後の分析の結果が表 1 である。

第一因子は、充実性、豊かさ、にぎやかさを示しており、充実性因子 (Abundant Factor) と言えよう。充実性因子は次の 10 項目から構成される。SD 2 「固い—柔らかい」、SD 3 「貧弱な—豊かな」、SD 9 「開放的—閉鎖的」、SD 12 「暗い—明るい」、SD 14 「充実した—空虚な」、SD 18 「にぎやかな—さびしい」、SD 19 「緊張した—くつろいだ」、SD 20 「愉快な—不愉快な」、SD 21 「満足した—不満足な」、SD 23 「快な—不快な」である。

第二因子は、まとめ、安定性、調和性を示しており、統合性因子 (Integration Factor) と言えよう。統合性因子は次の 5 項目から構成される。SD 1 「まとまった—雑然とした」、SD 8 「未熟な—成熟した」、SD 11 「安定した—不安定な」、SD 15 「不調和な—調和した」、SD 22 「ぴったりした—ぴったりしない」である。

第三因子は、強さ、大きさなどを示しており、力量性因子 (Magnitude Factor) と言えよう。力量性因子は次の 4 項目から構成される。SD 5 「深い—浅い」、SD 10 「小さい—大きい」、SD 13 「弱い—強い」、SD 16 「積極的—消極的」である。

また、次の SD 4 「女性的—男性的」、SD 6 「こせこせした—のびのびとした」、SD 7 「動的—静的」、SD 17 「アブノーマルな—ノーマルな」の 4 つの尺度は、どの因子にも負荷しなかった。

ここで、以上の 3 因子 (充実性因子、統合性因子、力量性因子) が抽出されたが、岡田 (1984) や斎藤 (1991) の箱庭に関する研究では、4 因子 (充実性因子、統合性因子、力量性因子、柔軟性因子) が抽出・命名されている。その中の柔軟性因子 (Flexibility Factor) 以外は、筆者が因子抽出・命名したものとほぼ一致するものであった。

表1 因子分析の結果 (最尤因子分析法, バリマックス回転)

	項目	第1因子 充実性	第2因子 統合性	第3因子 力量性
SD12	暗い—明るい	0.776	-0.094	0.015
SD19	緊張した—くつろいだ	0.617	-0.141	0.139
SD 2	固い—柔らかい	0.538	0.048	0.071
SD 3	貧弱な—豊かな	0.519	-0.372	-0.295
SD20	愉快的な—不愉快的な	-0.745	0.028	0.151
SD23	快な—不快な	-0.740	0.367	0.031
SD21	満足した—不満足な	-0.737	0.317	0.242
SD18	にぎやかな—さみしい	-0.727	-0.022	0.334
SD14	充実した—空虚な	-0.689	0.248	0.292
SD 9	開放的—閉鎖的	-0.670	0.071	0.389
SD11	安定した—不安定な	-0.379	0.597	0.068
SD 1	まとまった—雑然とした	-0.093	0.568	0.121
SD22	びったりした—びったりしない	-0.462	0.529	0.198
SD15	不調和な—調和した	0.207	-0.635	-0.012
SD 8	未熟な—成熟した	0.175	-0.502	-0.314
SD16	積極的—消極的	-0.484	0.028	0.685
SD 5	深い—浅い	0.005	0.359	0.511
SD13	弱い—強い	0.216	-0.061	-0.677
SD10	小さい—大きい	0.162	-0.247	-0.586
SD 4	女性的—男性的	-0.312	0.221	-0.266
SD 6	こせこせした—のびのびした	0.343	-0.174	-0.108
SD 7	動的—静的	-0.193	-0.297	0.406
SD17	アブノーマルな—ノーマルな	0.121	-0.418	0.317
	説明済	5.652	2.623	2.580
	寄与率	0.246	0.114	0.112

2. 両群における各因子の比較

3 因子 (充実性因子, 統合性因子, 力量性因子) で, 両群 (不安低減群, 不安増大群) における各因子の平均値について t 検定を行った結果が表 2 である。両群全体では, 充実性因子, 統合性因子, 力量性因子のいずれも有意差が見られた。

第一因子の充実性は, 不安増大群よりも不安低減群の方が 5% 水準で有意に高かった。つまり, 不安低減群の作品イメージは充実しており, 不安増大群はより空虚なイメージであったと考えられる。第二因子の統合性は, 不安増大群よりも不安低減群の方が 1% 水準で有意に高かった。つまり, 不安低減群の作品イメージはまとまっており, 不安増大群は統合性のないイメージであったと考えられる。第三因子の力量性は, 不安増大群よりも不安低減群の方が 1% 水準で有意に高かった。つまり, 不安低減群の作品イメージは, 強く・大きく, 不

表2 不安低減群と不安増大群の因子別の平均値 (SD)

群 因子	不安低減群 (n=122)	不安増大群 (n=62)	t 値
充実性	5.13 (1.11)	4.67 (1.24)	2.576*
統合性	4.48 (1.15)	2.90 (1.30)	2.901**
力量性	4.73 (1.10)	2.24 (1.19)	2.236*

* p<.05 ** p<.01

表3 不安低減高群と不安増大高群の因子別の平均値 (SD)

群 因子	不安低減高群 (n=48)	不安増大高群 (n=48)	t 値
充実性	5.27 (1.08)	4.71 (1.27)	2.329*
統合性	4.58 (1.13)	3.90 (1.33)	2.688**
力量性	4.85 (1.14)	4.46 (1.27)	1.603

* p<.05 ** p<.01

不安増大群は弱く・小さいイメージであったと考えられる。こうして不安低減群と不安増大群の作品イメージが、充実性因子、統合性因子、力量性因子の3因子と関係していることがわかった。不安低減群は各因子の肯定的な面、充実し、統合的で、強く・大きい感じが抱かれており、不安増大群は各因子の否定的な面、空虚で、統合性がなく、弱い・小さいイメージに不安低減群よりも傾いている。

両高群では、平均値を比較した結果(表3)、充実性因子と統合性因子に有意差が見られた。第一因子の充実性は、不安増大高群よりも不安低減高群の方が5%水準で有意に高かった。つまり、不安低減高群の作品イメージは充実しており、不安増大高群は空虚なイメージであったと思われる。第二因子の統合性は、不安増大高群よりも不安低減高群の方が1%水準で有意に高かった。つまり、不安低減高群の作品イメージはまとまっており、不安増大高群は統合性のないイメージであった。

こうして不安低減高群と不安増大高群の作品イメージが、充実性因子、統合性因子の2因子と関係していることがわかった。不安低減高群は各因子の肯定的な面、充実し統合性があるイメージを抱きやすく、不安増大高群は各因子の否定的な面、空虚で統合性がないイメー

ジに不安低減高群よりも傾いている。

3. 不安低減群と不安増大群におけるコラージュ作品に対するイメージについて

1) 不安低減群と不安増大群のSD尺度の平均値

表4は、両群(不安低減群と不安増大群)における各SD尺度の平均値を示している。不安低減群と不安増大群で、平均評定値に有意差が認められたのは、SD項目の1, 3, 5, 8, 9, 14, 21, 22, 23で、項目16には傾向があった。また、不安低減高群と不安増大高群で平均評定値に有意差が認められたのは、SD項目の1, 3, 5, 6, 8, 14, 21, 22, 23で、項目19には傾向があった。両群の各SD尺度によるコラージュ作品のイメージの特徴は、平均点において2ポイント以上の大きな差のあるものは見あたらず、全体的に見れば不安低減群、不安増大群ともポジティブなイメージであるものが多い。しかし相対的には不安低減群の方が不安増大群よりもポジティブな評価をすることが多く、不安増大群の方が不安低減群よりもネガティブな評価をすることが多いように思われる。

表4 不安低減群と不安増大群、及び不安低減高群と不安増大高群のSD項目の平均評定値(SD)

SD項目	群			群		
	不安低減群 (n=122)	不安増大群 (n=62)	t 値	不安低減高群 (n=48)	不安増大高群 (n=48)	t 値
1. まとまった—雑然とした	3.30(1.87)	4.26(1.73)	-3.27**	3.25(1.79)	4.31(1.88)	-2.83**
2. 固い—柔らかい	4.71(1.59)	4.58(1.72)	0.57	4.73(1.75)	4.52(1.54)	0.62
3. 貧弱な—豊かな	4.99(1.37)	4.19(1.72)	3.47**	5.19(1.33)	4.08(1.62)	3.65**
4. 女性的—男性的	3.06(1.81)	3.13(1.73)	-0.26	3.06(2.01)	3.23(1.74)	-0.43
5. 深い—浅い	3.49(1.37)	4.07(1.72)	-2.51*	3.40(1.43)	4.08(1.65)	-2.19*
6. こせこせした—のびのびした	4.79(1.48)	4.40(1.72)	1.54	4.96(1.38)	4.21(1.75)	2.33*
7. 動的—静的	3.84(1.78)	3.86(1.72)	-0.04	3.79(1.79)	3.46(1.88)	0.89
8. 未熟な—成熟した	3.98(1.34)	3.31(1.70)	3.12**	4.04(1.41)	3.21(1.44)	2.86**
9. 開放的—閉鎖的	2.66(1.48)	3.21(1.72)	-2.26*	2.65(1.47)	3.02(1.76)	-1.14
10. 小さい—大きい	4.80(1.54)	4.52(1.70)	1.14	5.04(1.46)	4.73(1.67)	0.98
11. 安定した—不安定な	3.55(1.55)	3.55(1.70)	0.00	3.38(1.50)	3.54(1.71)	-0.51
12. 暗い—明るい	5.50(1.63)	5.04(1.71)	1.62	5.36(1.70)	4.95(1.68)	1.33
13. 弱い—強い	4.81(1.34)	4.56(1.68)	1.41	4.78(1.25)	4.47(1.60)	0.85
14. 充実した—空虚な	2.96(1.60)	3.65(1.69)	-2.03*	3.15(1.52)	3.66(1.60)	-2.16*
15. 不調和な—調和した	4.48(1.78)	4.13(1.69)	1.30	4.42(1.84)	4.05(1.90)	0.93
16. 積極的—消極的	3.04(1.49)	3.38(1.67)	-1.77+	3.15(1.47)	3.57(1.54)	-1.08
17. アブノーマルな—ノーマルな	4.27(1.57)	4.27(1.69)	-0.55	4.25(1.70)	4.39(1.47)	0.00
18. にぎやかな—さみしい	2.71(1.67)	2.96(1.69)	-0.75	2.92(1.46)	3.11(1.70)	-0.77
19. 緊張した—くつろいだ	5.25(1.44)	4.73(1.69)	1.27	5.01(1.42)	4.73(1.45)	1.77+
20. 愉快な—不愉快な	2.77(1.45)	3.00(1.66)	-1.38	2.81(1.57)	3.13(1.56)	-0.72
21. 満足した—不満足な	2.44(1.54)	3.44(1.70)	-2.72**	2.69(1.27)	3.37(1.82)	-3.12**
22. びったりした—びったりしない	3.00(1.52)	3.96(1.69)	-2.94**	3.17(1.52)	3.89(1.62)	-2.99**
23. 快な—不快な	2.48(1.37)	3.25(1.73)	-3.12**	2.53(1.30)	3.26(1.76)	-2.44**

+p<0.01 * p<0.05 ** p<0.01

2) 不安低減群・不安増大群と SD 尺度の関係について

不安低減群と不安増大群の各 SD 尺度によるコラージュ作品の相対的なイメージをクロス集計で比較した。つまり、各項目の7段階評定値を1～3, 4, 5～7に3分し、各群（2群：不安低減群と不安増大群、及び2群：不安低減高群と不安増大高群）とクロスさせて、その度数をカイ自乗検定にかけた。両群で有意な項目は表5と表6より、SD1「まとまった—雑然とした」、SD3「貧弱な—豊かな」、SD8「未熟な—成熟した」、SD16「積極的—消極的」、SD21「満足した—不満足な」、SD22「びったりした—びったりしない」、SD23「快な—不快な」であった。また傾向が認められたのは、SD5「深い—浅い」、SD9「開放的—閉鎖的」、SD14「充実した—空虚な」であった。

両高群で有意な項目は表5より、SD3「貧弱な—豊かな」、SD5「深い—浅い」、SD8「未熟な—成熟した」、SD21「満足した—不満足な」、SD22「びったりした—びたりしない」、SD23「快な—不快な」であった。また傾向が認められたのは、SD15「不調和な—調和した」であった。

不安低減群のコラージュ作品のイメージの特徴は、「まとまった、豊かな、深い、成熟した、開放的、充実した、積極的、満足した、ピッタリした、快な」のポジティブな、あるいはその傾向のものである。不安増大群の各 SD 尺度によるコラージュ作品の相対的なイメージの特徴や傾向は、「雑然とした、貧弱な、浅い、未熟な、閉鎖的、空虚な、消極的、不満足な、ピッタリしない、不快な」である。不安低減高群のコラージュ作品のイメージの特徴や傾向は、「豊かな、深い、成熟した、調和した、満足した、ピッタリした、快な」である。不安増大高群のコラージュ作品の相対的なイメージの特徴や傾向は、「貧弱な、浅い、未熟な、不調和な、不満足な、ピッタリしない、不快な」である。

表5 不安群(2)と SD 評定(3)の関係が有意であった SD 項目

SD 項目 群	SD1	SD2	SD3	SD4	SD5	SD6	SD7	SD8	SD9	SD10	SD11
不安低減群と不安増大群	*		**		+			**	+		
不安低減高群と不安増大高群			**		*			**			

SD12	SD13	SD14	SD15	SD16	SD17	SD18	SD19	SD20	SD21	SD22	SD23
		+		*					*	**	**
			+						**	**	**

+p<0.10 * p<.05 ** p<0.01

表6-1 不安群（不安低減群と不安増大群）とSD 評定の関係

SD 項目	評定値			
	1~3	4	5~7	全体
1. まとまった—雑然とした	75 (61.5)	9 (7.3)	38 (31.2)	122 (100.0)
$\chi^2=7.50$ df=2 p<.05	25 (40.3)	8 (12.9)	29 (46.8)	62 (100.0)
3. 貧弱な—豊かな	18 (14.8)	30 (24.6)	74 (60.6)	122 (100.0)
$\chi^2=10.27$ df=2 p<.01	21 (33.9)	16 (25.8)	25 (40.3)	62 (100.0)
5. 深い—浅い	56 (45.9)	40 (32.8)	26 (21.3)	122 (100.0)
$\chi^2=5.02$ df=2 p<.10	20 (32.3)	20 (32.3)	22 (35.4)	62 (100.0)
8. 未熟な—成熟した	33 (27.0)	59 (48.4)	30 (24.6)	122 (100.0)
$\chi^2=16.88$ df=2 p<.001	36 (58.1)	17 (27.4)	9 (14.5)	62 (100.0)
9. 開放的—閉鎖的	86 (70.5)	27 (22.1)	9 (7.4)	122 (100.0)
$\chi^2=5.91$ df=2 p<.10	37 (59.6)	13 (21.0)	12 (19.4)	62 (100.0)
14. 充実した—空虚な	69 (56.5)	28 (23.0)	25 (20.5)	122 (100.0)
$\chi^2=5.20$ df=2 p<.10	25 (40.3)	16 (25.8)	21 (33.9)	62 (100.0)
16. 積極的—消極的	65 (53.3)	41 (33.6)	16 (13.1)	122 (100.0)
$\chi^2=6.12$ df=2 p<.05	25 (40.3)	20 (32.3)	17 (27.4)	62 (100.0)
21. 満足した—不満足な	88 (72.1)	19 (15.6)	15 (12.3)	122 (100.0)
$\chi^2=6.66$ df=2 p<.05	34 (54.8)	12 (19.4)	16 (25.8)	62 (100.0)
22. ぴったりした—ぴったりしない	70 (57.4)	37 (30.3)	15 (12.3)	122 (100.0)
$\chi^2=15.45$ df=2 p<.001	25 (40.3)	14 (22.6)	23 (37.1)	62 (100.0)
23. 快な—不快な	94 (77.0)	19 (15.6)	9 (7.4)	122 (100.0)
$\chi^2=13.75$ df=2 p<.005	32 (51.6)	16 (25.8)	14 (22.6)	62 (100.0)

上段：不安低減群 下群：不安増大群 ()内は%
 評定値4は、いずれも「どちらでもない」を表す。

表6-2 不安群（不安低減高群と不安増大高群）とSD評定の関係

SD項目	評定値			
	1~3	4	5~7	全体
3. 貧弱な—豊かな	6	9	33	48
	(12.5)	(18.8)	(68.7)	(100.0)
	18	11	19	48
$\chi^2=9.97$ df=2 p<.01	(37.5)	(22.9)	(39.6)	(100.0)
5. 深い—浅い	27	10	11	48
	(56.3)	(20.8)	(22.9)	(100.0)
	14	17	17	48
$\chi^2=7.22$ df=2 p<.05	(29.2)	(35.4)	(35.4)	(100.0)
8. 未熟な—成熟した	14	18	16	48
	(29.2)	(37.5)	(33.3)	(100.0)
	30	11	7	48
$\chi^2=11.03$ df=2 p<.005	(62.5)	(22.9)	(14.6)	(100.0)
15. 不調和な—調和した	17	3	28	48
	(35.4)	(6.3)	(58.3)	(100.0)
	17	10	21	48
$\chi^2=4.77$ df=2 p<.10	(35.4)	(20.8)	(43.8)	(100.0)
21. 満足した—不満足な	39	4	5	48
	(81.3)	(8.3)	(10.4)	(100.0)
	25	9	14	48
$\chi^2=9.25$ df=2 p<.01	(52.0)	(18.8)	(29.2)	(100.0)
22. ぴったりした—ぴったりしない	31	12	5	48
	(64.6)	(25.0)	(10.4)	(100.0)
	19	10	19	48
$\chi^2=11.23$ df=2 p<.005	(39.6)	(20.8)	(39.6)	(100.0)
23. 快な—不快な	39	6	3	48
	(81.2)	(12.5)	(6.3)	(100.0)
	25	13	10	48
$\chi^2=9.41$ df=2 p<.01	(52.1)	(27.1)	(20.8)	(100.0)

上段：不安低減高群 下群：不安増大高群 ()内は%
 評定値4は、いずれも「どちらでもない」を表す。

また両高群では、両群で有意もしくは傾向のあったSD1「まとまった—雑然とした」、SD9「開放的—閉鎖的」、SD14「充実した—空虚な」、SD16「積極的—消極的」に見られず、SD15「不調和な—調和した」に傾向が認められた。これはSD1, 9, 14, 16では、得点差の高い両群には分布の違いが認められないことを意味している。逆にSD15では、得点差の高い両群に分布の違いがある傾向が見られたといえる。

V 考 察

1. 不安低減群・不安増大群と各SD尺度の関係についての検討

ここでは、不安低減群と不安増大群がコラージュを作成する中で体験した感情イメージに相当した各形容詞対について考察していく。

表4から不安低減群(不安低減高群を含む)の作品イメージは、不安増大群(不安増大高群を含む)よりも「まとまった、豊かな、深い、成熟した、充実した、満足した、ぴったりした、快な、のびのびした、開放的」であり、「積極的、くつろいだ」傾向があった。

表5から各SD尺度の中で、両群全体で有意であったものは、SD1, 3, 8, 16, 21, 22, 23であり、傾向が認められたのはSD5, 9, 14であった。両高群で有意であったものは表5より、SD3, 5, 8, 21, 22, 23であり、傾向が認められたのはSD15であった。

では不安低減群と不安増大群、不安低減高群と不安増大高群の各SD尺度の感情体験イメージを項目に沿って見ていくことにする。表6-1と表6-2は、不安群とSD項目の評定の関係を示している。

SD1「まとまった—雑然とした」では、不安低減群と不安増大群で有意が認められたが、高群では有意でなかった。不安低減群では「まとまった」イメージを抱きやすく、不安増大群では「まとまった」イメージ、「雑然とした」イメージの両方を抱くことが明らかとなった。つまり、不安低減群ではまとまって統一的な作品イメージであり、不安増大群では統一的なイメージを抱く場合と、まとまりのないイメージを抱く場合の2極に分かれる。この「まとまった—雑然とした」は統合性因子に含まれており、形容詞対の意味から考えても統合性の意味合いが強いと思われる。感情体験の中で、不安低減群は分散と統一の過程を統合することができ、不安増大群は分散と統一の過程を統合できる場合と、統合できない場合に分かれる。不安増大群でもまとまった場合、おそらくそれは健康的な不安であり、その発展の可能性の前に立ちすくみ、それが「不安になった」と感じるのではなかろうか。コラージュ体験の中で分散と統一のバランスに大きくゆらいでしまったのである。

SD3「貧弱な—豊かな」では、不安低減群と不安増大群、不安低減高群と不安増大高群のいずれも有意であり、ほぼ同じ結果であった。表6-1より、不安低減群では「豊かな」イメージを抱きやすく、不安増大群では「豊かな」「どちらでもない」「貧弱な」イメージのいずれをも抱くことが明らかである。不安低減群は「満ち足りて不足がない」作品イメージであり、不安増大群では「満ち足りて不足がない」イメージ、「弱々しく、みすぼらしい」イメージ、または「どちらとも決めかねる」イメージを抱く場合の3極に分かれる。しかし、不安低減高群はより「豊か」に、不安増大高群はより「豊か」とより「貧弱な」のイメージに二極化している(表6-2参照)。

「貧弱な—豊かな」は充実性因子に含まれ、カタルシスの要素が強いと思われる。不安低

減群はコラージュでの感情体験の中でカタルシス効果を感じ、また不安増大群であっても「豊かな」イメージを抱くことは、カタルシスを得られることも十分にありえると思われる。不安増大群で「貧弱な」イメージを抱いた場合、作品を自己評価するにあたって感情を体験することの度合いが貧弱であった、つまりコラージュ体験の中で感情にあまり触れなかった、または貧困な感情に触れてしまったということも考えられる。もちろん作品自体が貧弱であることも考えられるが、空白が多く貧弱な作品であっても、作成者がそこでピッタリきてカタルシスを得る場合には「貧弱な」の評定よりも、「豊かな」や「どちらでもない」の評定になるのではないかと考えられる。

SD5「深い—浅い」では、不安低減群と不安増大群では傾向が、不安低減高群と不安増大高群では有意であることが見られた。表6-1より見ると、不安低減群は「深い」イメージを抱きやすく、不安増大群では「深い」「どちらでもない」「浅い」イメージのいずれをも抱く傾向があった。不安低減群は「質・量とも底まで行こうとした」作品イメージであり、不安増大群では「質・量とも底まで行った」イメージ、「底まで十分行かなかった」イメージ、または「どちらとも決めかねる」イメージを抱く場合の3極に分かれる傾向がある。不安増大高群で「深い」が30%弱であるのに対し不安低減高群では56%であったことから見ても、不安低減高群は「深い」感情体験のイメージである（表6-2参照）。つまり「コラージュによってとても安心した人」は「深い体験をした」と感じていると思われる。「深い—浅い」は力量因子に含まれ、感情体験や作品を作るといった力や能力を測る要素が強いと思われる。コラージュ作成過程の中で深く感情に触れたかどうかの自己評定では、不安低減群はコラージュでの感情を体験する能力が「深い」と感じたが、また不安増大群ではその能力が深かったのか、浅かったのかはあまり関係がない。不安になったけれど深く感情に触れたと感じる人も、浅かったと感じる人もいるわけである。感情に深く触れたから不安になった場合もあるろうし、不安な感情がわき上がることを恐れて浅くなった場合もあり得るのではなからうか。

SD8「未熟な—成熟した」では、不安低減群と不安増大群、不安低減高群と不安増大高群ともに有意であった。表6-1と表6-2より、不安低減群は「どちらでもない」イメージを抱きやすく、不安増大群では「未熟な」イメージを抱くことが明らかとなった。不安低減高群は、「未熟な」「どちらでもない」「成熟した」に散らばった。不安増大高群は62%が「未熟な」イメージであった。全体での不安低減群は「成長したとも、していないとも言えない」作品イメージであり、不安増大群では「十分に成長していないし、熟達していない」イメージである。「未熟な—成熟した」は統合性因子に含まれ、形容詞対の意味から考えても統合的な要素が強いと思われる。不安低減群では分散と統一の過程を自己評価する上で「どちらでもない」という「未熟な」と「成熟した」のどちらのイメージにも決めかねているが、不安増大群は分散と統一の過程が「未熟な」ものであると評価している。これはコラージュを作成する上でさまざまな感情が体験されるのだが、分散と統一のバランスに大きくゆらいでそれを

扱いきれず、不安という形を取ったことで「未熟な」イメージを抱いたのではなかろうか。不安低減高群では「成熟した」イメージが不安増大高群よりも抱かれるのはもちろんのこと、「未熟な、どちらでもない、成熟した」のどのイメージでも感情が大きくゆらいでしまうことなく扱うことができ、大きな安心感を得たと考えられる。ただし「どちらでもない」の場合、感情に触れなかったから安心であると感じたことも考えられる。不安増大高群(62.5%)は、不安増大群全体(58.1%)よりも「未熟な」イメージを抱いており、さらに分散と統一のバランスを崩したのではなかろうか。

SD9「開放的—閉鎖的」は表5より不安低減群と不安増大群に傾向が見られたが、高群では有意でなかった(表6-1と表6-2参照)。不安低減群は「開放的」なイメージを抱きやすく、不安増大群でも「開放的」なイメージを抱くのだが、「閉鎖的」イメージをも不安低減群よりも抱いている傾向があった。「開放的—閉鎖的」は充実性因子に含まれておりカタルシス的要素が強いと思われる。不安低減群・不安増大群ともコラージュでの感情体験の中でカタルシス効果を感じており、不安低減群の場合おそらく肯定的な感情の開放であるが、不安増大群の場合「開放的」であることでネガティブな感情の自己表出が行われ不安が高まったのではないだろうか。また不安増大群の「閉鎖的」「どちらでもない」といったイメージは、その体験がネガティブであったから不安になった場合と、「閉鎖的」な感情に触れたから不安になった場合が考えられる。これは不安低減群では、コラージュ体験によって安心したときには「閉鎖的」なイメージが少ないことから考えられる。

SD14「充実した—空虚な」は不安低減群と不安増大群に傾向が見られたが、高群では有意でなかった(表6-1と表6-2参照)。不安低減群は「充実した」イメージを抱きやすく、不安増大群では「充実した」「どちらでもない」「空虚な」イメージを抱くが、不安低減群よりも「空虚な」イメージを抱いている傾向があった。「充実した—空虚な」は充実性因子に含まれ、カタルシス的要素が強いと思われる。不安低減群はコラージュでの感情体験の中で「充実した」というカタルシスを感じているが、不安増大群が「充実した」イメージであったのは、体験した何らかの感情がしっくりきたという充実感の高揚であり、それは健康的で発展的な不安であると思われる。また不安増大群ではそれとともに「虚しい」感じも得ているが、分散・統一の過程で体験した何らかの感情がうまく処理できず「分散してしまった」のではないだろうか。

SD15「不調和な—調和した」は不安低減高群と不安増大高群に傾向が見られたが、不安低減群と不安増大群では有意でなかった(表6-1と表6-2参照)。不安低減高群は「調和した」イメージを抱きやすく、不安増大高群では「調和した」と「不調和な」というイメージを抱く傾向があった。「不調和な—調和した」は統合性因子に含まれ、統合性要素が強いと思われる。不安低減高群はコラージュでの感情体験の中で分散と統一の過程を「調和した」が、不安増大高群でも「調和した」場合は分散と統一の統合過程の高揚感により健康的な不安感が

引き起こされたのではなからうか。また不安増大高群の「不調和な」場合はコラージュ体験の中で分散と統一のバランスが大きくゆらいでしまったと思われる。また不安低減高群では「どちらでもない」が少なく、「不調和な—調和した」のどちらかのイメージにピッタリした傾向が考えられる。

SD 16「積極的—消極的」は不安低減群と不安増大群では有意であったが、不安低減高群と不安増大高群では見られなかった（表 6-1 と表 6-2 参照）。不安低減群は「積極的」なイメージを抱きやすく、不安増大群では「積極的」「どちらでもない」「消極的」というイメージを抱くが、不安低減群に比べて「消極的」と感じる事が明らかとなった。「積極的—消極的」は力量性因子に含まれ、感情体験や作品を作るといった力や能力を測る要素が強いと思われる。コラージュ作成過程の中で感情に積極的に触れたかどうかの自己評定では、不安低減群はコラージュでの感情を体験する能力が「積極的」と感じたが、不安増大群では感情に「積極的」に触れた人と「消極的」に触れた人もいた。これは感情に「積極的」に触れたから不安になった場合もあろうし、何らかの感情がわき上がることを恐れて「消極的」になった場合のどちらもあり得るが、不安増大群の方が不安低減群よりも感情を体験することに「消極的」であったと考えられる。

SD 21「満足した—不満足な」は、不安低減群と不安増大群、不安低減高群と不安増大高群のいずれも有意であった（表 6-1 と表 6-2 参照）。不安低減群は「満足した」イメージを抱きやすく、不安増大群は「満足した」イメージを抱くが不安低減群に比べて「不満足な」イメージを抱くことが明らかとなった。また不安低減群と不安増大群全体よりも不安低減高群と不安増大高群の方が、不安低減群は「満足した」（81.3%）、不安増大群は「不満足な」（29.2%）イメージを抱く傾向が強く出ている。「満足した—不満足な」は充実性因子に含まれてカタルシスの要素が強いと思われる。自己評価で、不安低減群はコラージュでの感情体験の中で「満足した」というカタルシスを感じているが、不安増大群が「満足した」イメージであったのは、体験した何らかの感情がしっくりきたという充実感の高揚であり、それは健康的で発展的な不安であると思われる。不安増大群では不安低減群よりも「不満足な」感じも抱いているが、これは分散・統一の過程で体験した何らかの感情に十分触れることができなかったか、ネガティブな感情に触れてしまったことが考えられる。

SD 22「ぴったりした—ぴったりしない」は、不安低減群と不安増大群、不安低減高群と不安増大高群のいずれも有意であった（表 6-1 と表 6-2 参照）。不安低減群は「ぴったりした」イメージを抱き、不安増大群は「ぴったりしない」イメージをより多く抱くことが明らかとなった。不安低減高群と不安増大高群では「ぴったりした」「ぴったりしない」の両方のイメージに分かれた。「ぴったりした—ぴったりしない」は統合性因子に含まれており、統合的要素が強いと思われる。不安低減群は自分の作品にぴったりした」という評価を与えており、コラージュ作成の感情体験の中で分散と統一の過程が「ぴったりした」と感じているが、不安

増大群でも「ぴったりした」場合は分散と統一の統合過程の高揚感により健康的な不安感が引き起こされたのではなかろうか。また不安増大群の「ぴったりしない」場合は、コラージュ体験の中で分散と統一のバランスに大きくゆらいでしまったと思われる。また高群の方が全体よりも不安低減群では「ぴったりした」、不安増大群では「ぴったりしない」イメージの割合が多かった。

SD 23「快な-不快な」は、不安低減群と不安増大群、不安低減高群と不安増大高群のいずれも有意であった(表6-1と表6-2参照)。不安低減群は「快な」イメージを多く抱き、不安増大群でも「快な」イメージを抱くが、不安低減群よりも不安増大群では「不快な」イメージを抱きやすいことが明らかとなった。全体と高群の不安低減群とも「不快な」イメージを抱くことが少なかった。「快な-不快な」は充実性因子に含まれ、カタルシスの要素が強いと思われる。自己評価で、不安低減群はコラージュでの感情体験の中で「快な」というカタルシスを感じているのだが、不安増大群において「快な」イメージであったのは、体験した何らかの感情がしっくりきたという充実感の高揚があり、それは健康的で発展的な不安であると思われる。不安増大群では不安低減群よりも「不快な」感じも抱いているが、これは分散・統一の過程で体験した何らかの感情に十分触れることができなかったか、ネガティブな感情に触れてしまったことが考えられる。

2. SD尺度の3因子ごとのまとめ

これまで有意差および傾向の見られたSD尺度ごとに考察してきたが、3因子(充実性・統合性・力量性)ごとにまとめると以下のようになる。

(1) 充実性因子に分類されたのは、SD 3, 9, 14, 21, 23であった。

不安低減群はコラージュでの感情体験の中で「豊かな、開放的、充実した、満足した、快な」といったカタルシス要素の強いイメージやその傾向を抱いていると思われる。不安増大群は「貧弱な、空虚な、閉鎖的、不満足な、不快な」感じやその傾向を抱いているが、これは分散・統一の過程で体験した何らかの感情に十分触れることができなかったか、ネガティブな感情に触れてしまったことが可能性として考えられる。

(2) 統合性因子に分類されたのは、SD 1, 8, 15, 22であった。

不安低減群は「まとまった、成熟した、調和した、ぴったりした」といったイメージやその傾向があり、分散と統一の過程を統合することができたと思われる。不安増大群は「雑然とした、未熟な、不調和な、ぴったりしない」というイメージやその傾向があり、この中にはコラージュ体験の中で分散と統一のバランスに大きくゆらいでしまった人もいないかと思われる。

(3) 力量性因子に分類されたのは、SD 5, 16であった。

不安低減群は「深い、積極的」なイメージであり、強さ、大きさなど力や能力を測る要素

が強い。自分のコラージュに対する取り組み方、つまり感情との関わりの姿勢が、深く、積極的であると思われる。不安増大群は「浅い、消極的」なイメージであり、つまり感情との関わりが、浅く、消極的であると感じているのではないかと思われる。

VI まとめ

不安低減群では作品に対して概してポジティブなイメージを抱いており、コラージュを作成することによるカタルシス効果や分散と統合の過程で治療的要因が働き、自己の内面に生じてきている様々な感情の葛藤を整理し言語化できなかった感情が表現ができたものと考えられる。

しかしながら被験者の3割が不安増大群であり、作品に対してネガティブなイメージを抱いていることは見逃せない。不安増大群では不安低減群で見られた治療的要因が働かず、ロロ・メイの言う「自己存在の価値が危険にさらされた」のだろうか。ただ、表現後の不安が何を意味するかについて、表現しきれなかった自らの存在の有り様を示しており、こういったことは日常の感情に関わるあらゆる表現に共通するのではないだろうか。もちろん表現後の不安が起こったからと言ってそれが悪いという訳ではない。不安から何か新しいものが生み出されることもあるだろう。

これらのことは、こういった表現をする上でその人にあった表現形式が必ずしも同一であるとは限らず、何か表現する際に自らが感情に自覚的になり、表現形式を選ぶことが必要であることを示唆している。これは日常の表現活動の中の感情の動きに関しても同様に言えると思われる。

VII 今後の課題

コラージュそのものに安全・回避性の力が備わっていたとしても、心理臨床場面にあたっては慎重に行うことが必要であることは言うまでもない。本研究ではあくまでも自己啓発的なコラージュ活動であり、今後はその点でこれまでの箱庭療法やコラージュ療法の研究で繰り返し述べられているように、治療者－クライアント関係の中の「コラージュ療法」を考えていかなければならない。治療者－クライアント関係の護りの中での安心感・不安感はどのようであるのか、系列的理解の中ではそれがいかに変化して行くのか、また「コラージュ」という体験がどのような特質を持つのかなど、今後の課題として研究していきたい。

文 献

- Buck, R. E. & Privancher, M. A. 1972 Magazine picture collage as an evaluative technique. *American Journal of Occupational Therapy*, 26 (1), 36-39.

- 入江 茂 1993 コラージュ療法と他の諸技法との関連 森谷寛之他編『コラージュ療法入門』 創元社 157-167.
- 岩下豊彦 1983 『SD法によるイメージの測定』 川島書店
- 森谷寛之 1993 臨床場面でのコラージュ技法の歴史 森谷寛之他編『コラージュ療法入門』 創元社 26-32.
- 中井久夫 1993 コラージュ私見 森谷寛之他編『コラージュ療法入門』 創元社 137-146.
- 水島恵一 1991 芸術療法におけるイメージの原理 imago 芸術療法 青土社 186-190.
- 岡田康伸 1984 『箱庭療法の基礎』 誠信書房
- 斉藤 真 1991 箱庭表現に対する心理療法家の系列的理解 心理臨床学研究 9(1), 45-54.
- 杉浦京子 1994 『コラージュ療法』 川島書店
- May, R. 1953 Man's search for himself. New York: Norton. (小野泰博訳 1970 『失われし自我を求めて』 誠信書房)
- 山中康裕 1986 分析心理療法(ユング派)精神療法による自己実現 精神科 MOOK 15 金原出版